

野芥遺跡 9

—第20次調査報告—

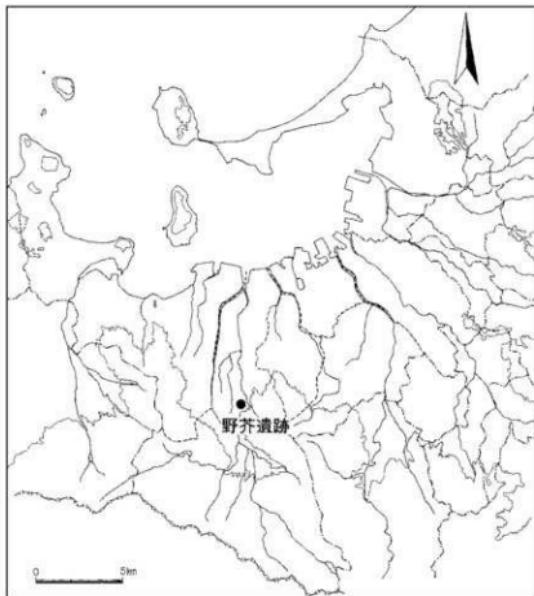
2023

福岡市教育委員会

の
け
野 芥 遺 跡 9

— 第 20 次 調査 報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1478集



調査番号 2030
遺跡略号 NKE-20

2023

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は宅地造成工事に伴う野芥遺跡第20次調査について報告するものです。調査では古墳時代の住居跡などが出土し集落の一端を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、NYワークス株式会社様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例　言

1. 本書は宅地造成にともない実施した野芥遺跡第20次調査の報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3. 檜出遺構には検出順に3桁の連番号を与え、性格を示す記号として、SC（竪穴建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SB（掘立柱建物）、SP（ピット）を頭に付した。
4. 掲載した遺物の番号は通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
5. 本書に掲載した挿図の作成、製図、写真撮影、執筆・編集は池田が行った。
6. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

目　次

Iはじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の組織	1
II立地と周辺の調査	1
III調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 竪穴建物	6
3 掘立柱建物	11
4 溝	13
5 土坑	13
6 ピット	17
7 そのほかの遺物	18
IVおわりに	19

遺跡名	野芥遺跡	調査次数	20次	調査略号	NKE-20
調査番号	2030	分布地図図幅名	重留 84	遺跡登録番号	319
申請地面積	1516m ²	調査対象面積	234.55m ²	調査面積	211.5m ²
調査期間	2020年10月12日～2020年11月11日			事前番号	2020-2-68
調査地	福岡市早良区野芥五丁目378番1				

I はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、早良区野芥五丁目378番1における宅地開発に伴う埋蔵文化財の有無の照会を令和2（2020）年4月21日付けで受理した（2020-2-68）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である野芥遺跡の範囲であり、すでに令和2年1月28日に確認調査を実施し地表下40～100cmで遺構を確認していた。埋蔵文化財課は確認調査の結果を踏まえ、申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、宅地造成部分の盛り土は遺構面への影響がないものの、恒久的な工作物である道路部分については埋蔵文化財への影響が避けられないため、令和2年度に発掘調査、同3・4年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで合意し委託契約を締結した。対象地は位置指定道路計画部分の234.55m²である。

発掘調査は令和2（2020）年10月12日から同11月11日に実施した（調査番号2030）。調査面積は211.5m²で、遺物はコンテナケース3箱分が出土した。

対象地のうち、調査を行った道路部分以外の宅地は盛り土により遺構面を保存している。

2 発掘調査の組織

調査委託 NYワークス株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財活用部埋蔵文化財課

課長 普波正人

調査第1係長 吉武学

庶務担当 文化財活用部文化財活用課

松原加奈枝

事前審査 文化財活用部埋蔵文化財課

田上勇一郎 山本晃平

調査担当 文化財活用部埋蔵文化財課

池田祐司

II 立地と周辺の調査

野芥遺跡は油山山塊から北西へ樹枝状に派生する丘陵から砂礫台地上に立地する。その範囲は南北1600m、東西300m、標高は14mから39mに広がり、山裾から末端は沖積低地に面する。旧石器時代から中世にかけての遺跡である。周辺には谷を挟んだ丘陵上に分布する梅林遺跡、クエゾノ遺跡、飯倉G遺跡、岩隈遺跡が同様の立地にあり、沖積低地には野芥大藪遺跡、免遺跡が連なる。さらに南東側の油山裾には山崎古墳群、霧ヶ滝古墳群、影塚古墳群、西油山古墳群などの多数の群集墳が広がっている。

今回の調査地点は野芥遺跡の南端部の丘陵上に広がる土石流段丘に位置し、標高26.8mほどの緩斜面である。南側には狭い谷がありその上流には前田池がある。

野芥遺跡ではこれまでに23次（令和3年末現在）の発掘調査が行われ、旧石器時代から近世の遺跡が知られている。本調査地点に関わる成果について周辺遺跡を含めて簡単に触れておく。旧石器時代では4、7、11次調査でナイフ形石器、角錐状石器、細石器などが出土し、7、11次では比較的まとまった遺構状、包含層が確認されている。縄文時代はまとまった出土はないが、各地点で土器片や石鏃などがみられる。そのなかで7次調査では草創期の可能性が指摘され、1、山崎古墳群

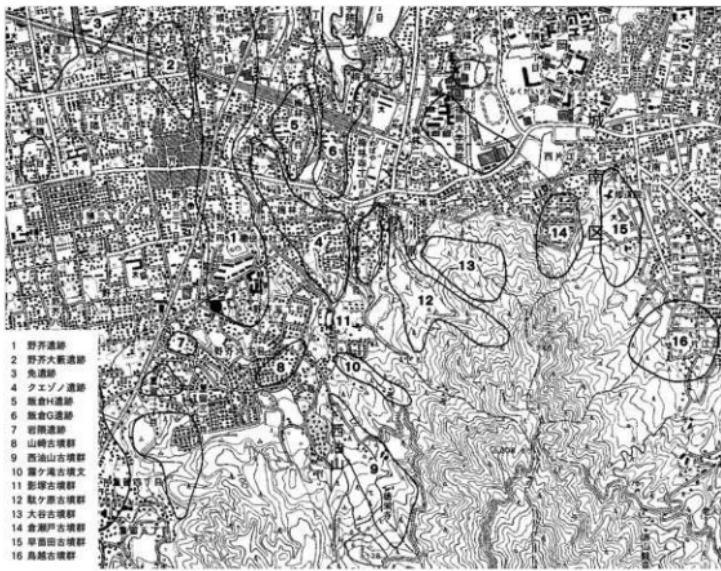


図1 遺跡位置図（1/25000）国土地理院2.5万分1地形図を加工して作成

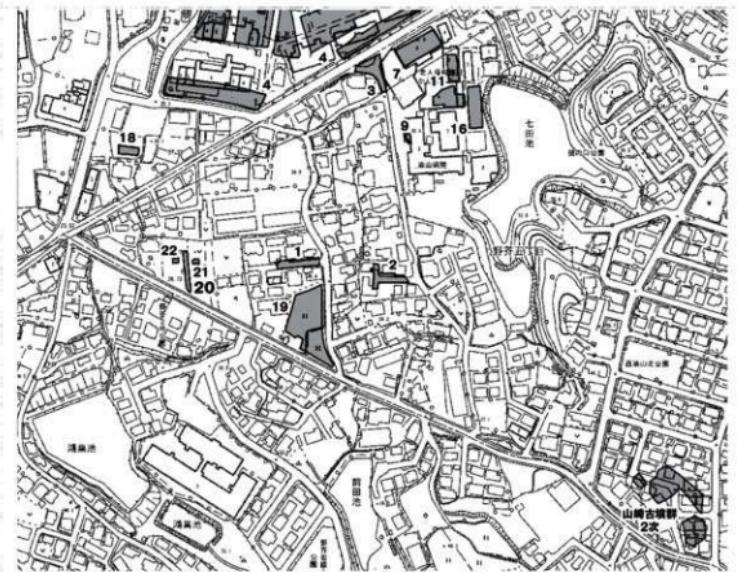


図2 調査地点位置図(1/4000)



図3 調査区付近空中写真（昭和30年代）

2次で晚期、刻目突帯文の小片が出土し、11次では石鎌、石匙など、野芥19次では轟式、刻目突帯文土器が出土している。弥生時代は4、7次で中期の遺構、遺物が報告されるが少ない。南に小谷を二つ隔てた丘陵上の岩隈遺跡では甕棺墓群が出土している。古墳時代では19次で油山裾の古墳群に先立つ6世紀中頃の古墳が出土している。集落遺跡は6世紀末から7世紀初めにかけての竪穴建物が1、2、4、19次調査で検出し、一帯に集落が営まれる。山崎古墳群2次では7世紀後半の土壙墓が確認されている。古代では19次調査で8世紀代の製鉄炉が4基出土し、10~12世紀初めの土坑が確認されている。また詳細な時期の報告がないが4次調査で出土した大型建物群について官衙的な様相が指摘され、円面鏡や刻字須恵器が出土している。野芥は「和妙抄」記載の能解郷の遺称とする説もある。中世前半は4、7次で遺物の報告はあるが少なく、山崎古墳群2次で溝、土壙墓が出土している。また西油山山麓の天福寺跡では11世紀には経塚が営まれ、12世紀には天福寺の隆盛を迎える。天福寺は本調査地南の谷筋から稻塚川の谷の上流にあたる。

III 調査の記録

1. 調査の概要

本調査地点は油山裾を西に向かって下がる緩斜面に位置する。現在、南側には油山方面へ延びる道路が走り、その南側には前田池からの谷が入る。現況は住宅化が進む中に残った田で、4面の田面からなり、それぞれ20cm前後の比高差がある。最も高い北東側の田面が標高27.1m、最も低い西側で26.4mほどである。東側は道路で田面との比高差1mほど、西側の宅地とは50cmほどの比高差がある。北側は宅地との間に側溝が走る。

調査範囲は幅6mほどの道路建設範囲である。造構面までの約40cmを重機で掘削した。その際、南端部については、南側道路からの進入路確保の為に当初一部を未掘で残し、終了間際に拡張した。

造構面は黄褐色砂質土で耕地造成の削平の為にはほぼ水平で、現在の耕作土直下の標高26.4mほどである。南側端部は緩やかに傾斜し、暗褐色土が堆積する。また南側では1m大以上の巨礫が造構

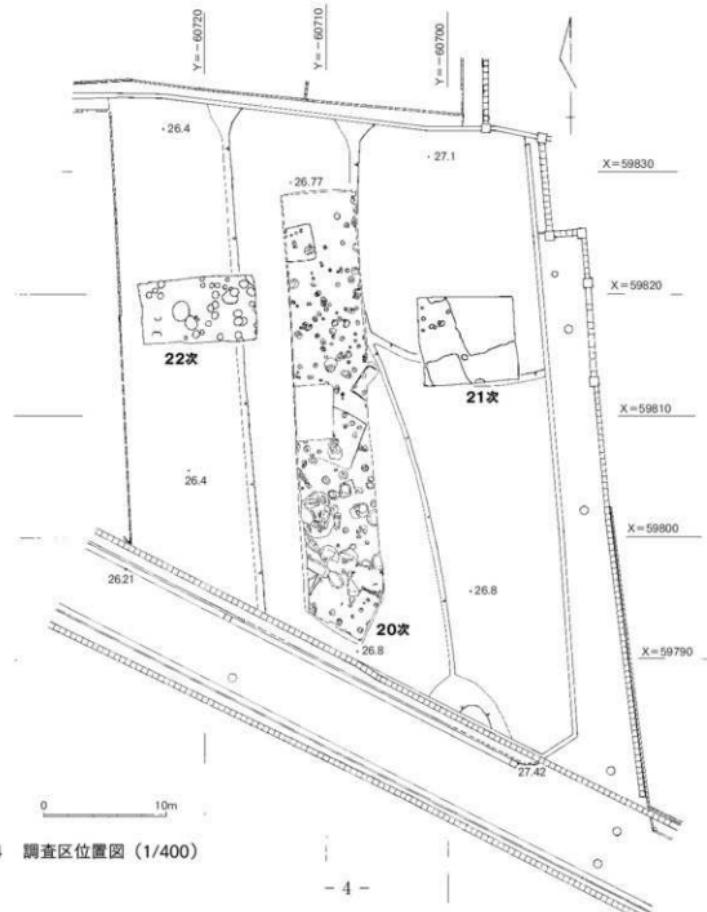


図4 調査区位置図 (1/400)



図5 造構配置図 (1/100)

面より頭を出している。

検出した遺構は竪穴建物3棟以上、総柱建物1棟、ピット、溝である。竪穴建物は方形プランがはっきりしているSC007、008、009以外は一部の確認であり規模や遺構の性格が不明確である。この他に縄文時代の石器、弥生前期の土器が少量であるが出土した。

2. 竪穴建物

SC003(図6) 調査区南側で暗褐色土を埋土とする直交するプランを確認した。中央を試掘トレンチに切られ、その南北のつながりは不確実だが方形プランの一端を想定した。大部分が調査区外西側に広がる。北東辺は長さ3.5m以上を確認し東寄りには巨礫がかかる。南西辺は2.3mを確認した。埋土は西側土層の6層でやや粘質のオリーブ黒を呈し砂粒が多く含む。側壁および床面は黄白色を呈す砂混じり土である。北東壁沿いには幅60cm、深さ10cmの溝が走り、底には巨礫がみられる。南側は確認した範囲にはまるように上面からの掘りこみがみられ床面はほとんど残っていない。遺物は北側埋土を中心に出土した。古墳時代後期。

出土遺物 破片のみで図化したものも反転復元による。1から6は土師器の高坏。1から5は細かな胎土で砂粒を含まない。1は口縁部で1/6からの復元。黄橙色の地に橙色土がかかる。内外とも横なで外面下部に搔目状がみられる。3が胎土、色調等が近く同一個体の可能性がある。2は外反して立ち上がる口縁部を持つ坏部で2/5が残る下部から反転した。口縁部は横なで調整で、外面下部には搔目がみられる。胎土は細かいが、1、2mmほどの砂粒をわずかに含む。やや淡い橙色を呈す。3は脚部から坏下部で外面坏部には搔目状がみられる。脚部は外面横なで、内面は工具による横なで。器面淡橙色で、茶色かかった橙色土をかける。5は外反して立ち上がる口縁部だが、2より直線的である。内外面に横なでを施す。6は坏の下部で外面に研磨、内面に刷毛目状がみられる。やや暗い橙色を呈す。4は脚部で1/4からの復元。内外面とも横なで調整で回転などと思われる。淡橙色を呈し、胎土は細かい。内面に齧歛類による門歛痕がわずかにみられる。7は土師器の壺で1/4からの復元。内外面ともに横なでを施し、外面胴部にも擦痕状が残る。内面胴部のなでは粘土の動きがみられる。器面黄橙色を呈すが、外面胴部は赤みがかり2次焼成を受けている。8は内済する口縁部が胴部へ急に屈曲し、小型丸底壺と考えられる。微細砂と赤色粒を含む。9は口縁部で外面に擦痕、内面は磨研状の調整がみられる。10は土師質の壺の胴部で外面平行叩き、内面はなでのため當て具痕が浅い。胎土は細かく砂粒をほとんど含まない。須恵器の生焼けか。同一個体と考えられる破片が多い。

SC007(図7・8) 調査区中央で確認した方形の竪穴建物で、西側は調査区外に広がる。南北辺4.5mほどで、SC008を切る。検出したレベルで中央部は床面の白色砂質土が露出しており、残存していた埋土3a層は2~5cmとわずかであった。3a層を除去した面で4本の主柱穴を確認し、床面と判断した。北側と東側の壁際の一部幅8~22cm、深さ3~5cmほどの壁溝がめぐる。硬化面は見られない。主柱穴の位置から東西長は南北とはほぼ同じかやや短い規模と考えられる。床面下の地山掘削面は中央部を残して幅80~140cmが周溝状にくぼむ。また、浅い10~15cm大の細かなくぼみが斑点状に多く見られる。

出土遺物 遺物は少なく埋土中の小片のみである。11、12は須恵器の壺蓋と身の小片で11は検出時、12は中央床面の出土。13は須恵器の壺底部等で壁溝出土。外面に刷毛目状、内面に指頭圧痕が残る。14、15は土師器で須恵器の壺を模したものか。14は007、008それぞれの検出時の破片が接合した。覆土に砂粒を多く含む。15は主柱穴SP128出土で胎土が細かい。16、17は壁溝出土。16は内

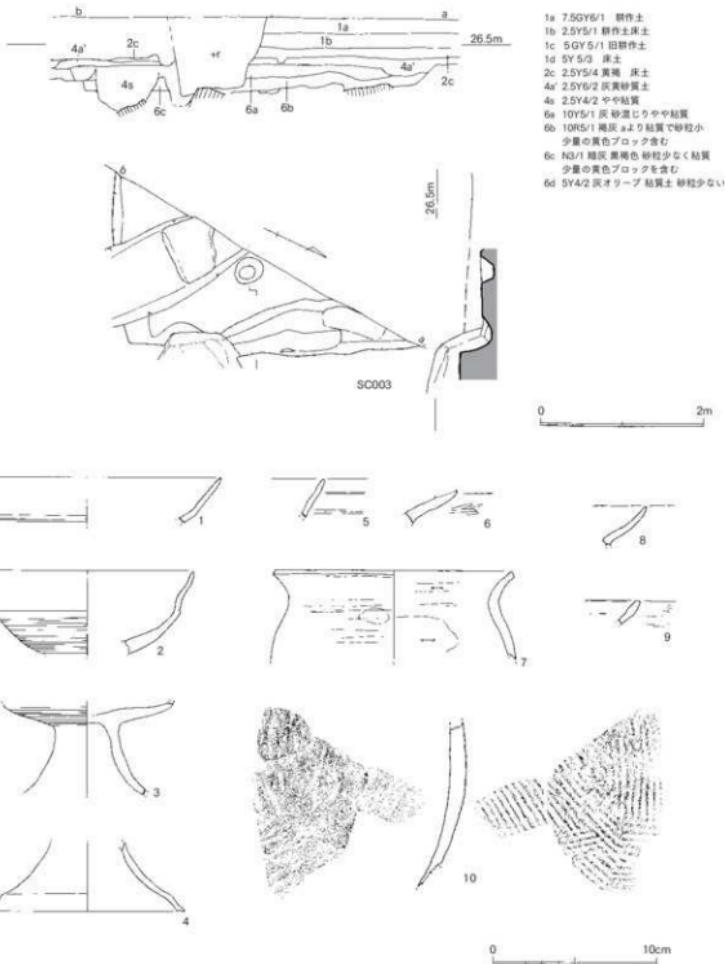


図6 SC003・SC003出土遺物実測図（1/60・1/3）

傾する端部で瓶の底とした。17は高壺の壺部か。胎土に砂粒を多く含む。内面に刷毛目が見られる。18~21は埋土出土。18は台付きの鉢か。胎土に砂粒多く、内外面に刷毛目が見られる。19、20は1/5、1/8の小片からの復元で弥生後期の底部と考えている。21は土製品で紡錘車であろう。径4.5cmほどと考えられるが、欠けた部分が大きく歪もある。穿孔は中心からずれるようで、少なくとも2つが重なっている。その一つは径4mmほどである。遺構の時期を示す出土状況に乏しいが、壁溝

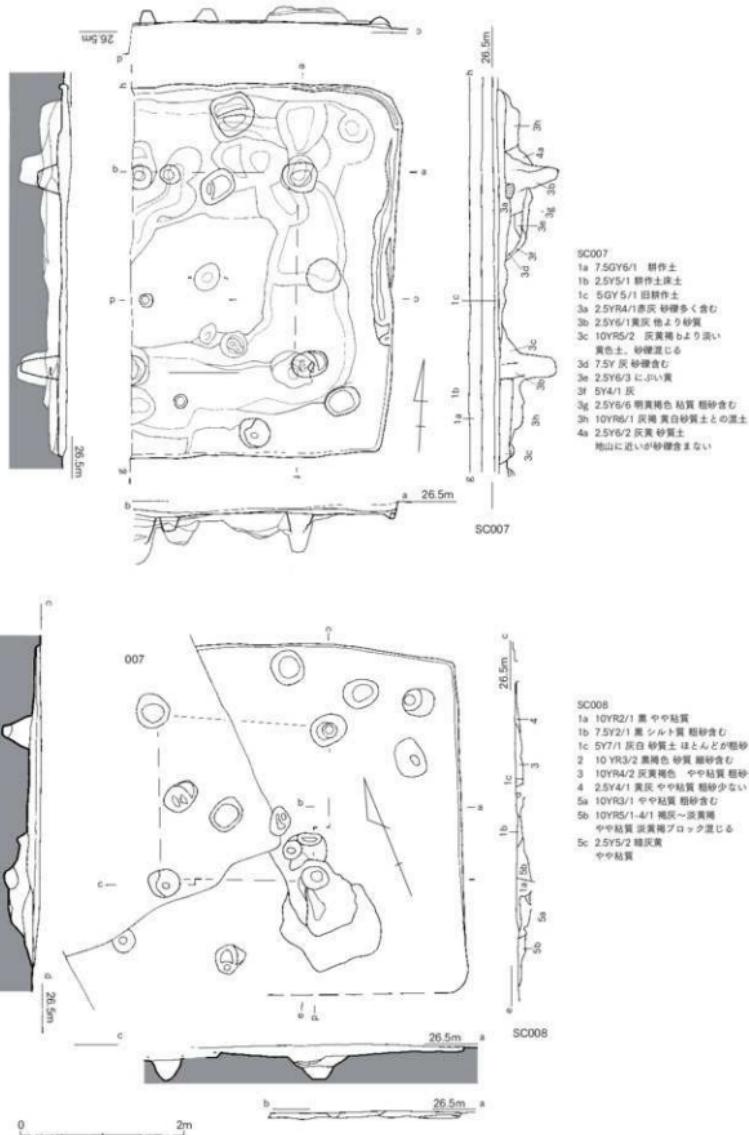


図7 SC007・008実測図 (1/60)

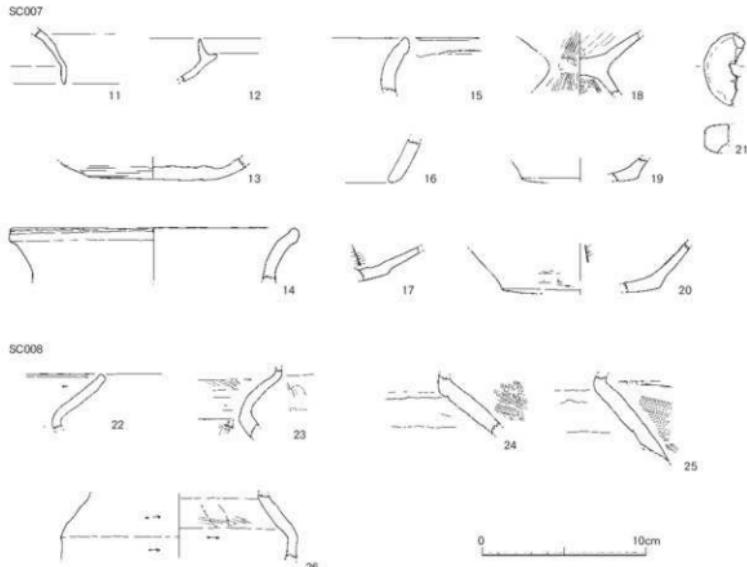


図8 SC007・008出土遺物実測図（1/3）

出土の13、15、16がより近い資料であろう。6世紀以降、11、12に近い後半から末が想定されよう。

S C 0 0 8 (図7・8) SC007の東側に方形のプランを確認した。SC007に切られる。遺構の残りは悪く5cm前後で、南側のプランは東側の隅はわずかに確認できるほかは不明瞭である。南北4m、東西1.6mほどの規模で埋土は粘質のある灰黄褐色土で砂粒を含む。007よりやや暗い。SC007の床面で検出したピットを含めて4本柱の主柱穴が想定される、平面プラン内ではやや北よりである。南東側の柱穴の周辺は黒褐色土から灰色土を埋土とするくぼみ状がみられ、柱穴に切られる。遺物は出土しておらず、遺構とは無関係と考える。

出土遺物 遺物は少なく小片のみで、浅い埋土からの出土であり遺構への帰属も不確かである。22から26は土師器である。22は壺の口縁部で口唇部内面がわずかに突起する。強い横なでを施す。23は壺の頸部で口縁部が立ち上がり、器面は外外面とも刷毛目の後に横なでを施す。24、25は壺または壺の肩部で外表面は刷毛目、内面は擦痕などとみなして調整で、粘土帶の接合痕が明瞭に残る。24はやや焼成が甘く外表面橙色を呈す。同一個体の可能性もある。25は肩部が緩やかに屈曲する肩部で器形は壺と考える。1/5からの復元。遺物から時期は決めがたい。

S C 0 0 9 (図9) 調査区中央東側で検出した堅穴建物で、一部拡張して北西辺2.6mの方形プランを確認した。埋土は褐色土で残りが良いところで深さ11cmほどである。北東隅にはカマドが設けられている。北西辺から南西、北東辺の一部には幅8cmほどの壁溝がめぐる。カマドは黄色粘土で袖部を築き、堅穴中央に向かって開く。粘土は床面からの高さ12、3cmが残る。袖の内径は50cmほどで、底は堅穴の床面より5cmほどくぼむ。底は硬化し一部は赤変する。袖の側面も一部赤変している。くぼみの中央には径12cmほどの花崗岩の礫を立て支石とする。カマド内には灰褐色土が溜まり、縦断面8層に焼土がみられるが、崩落によるとと思われる。支石の両脇には土師器の壺片が

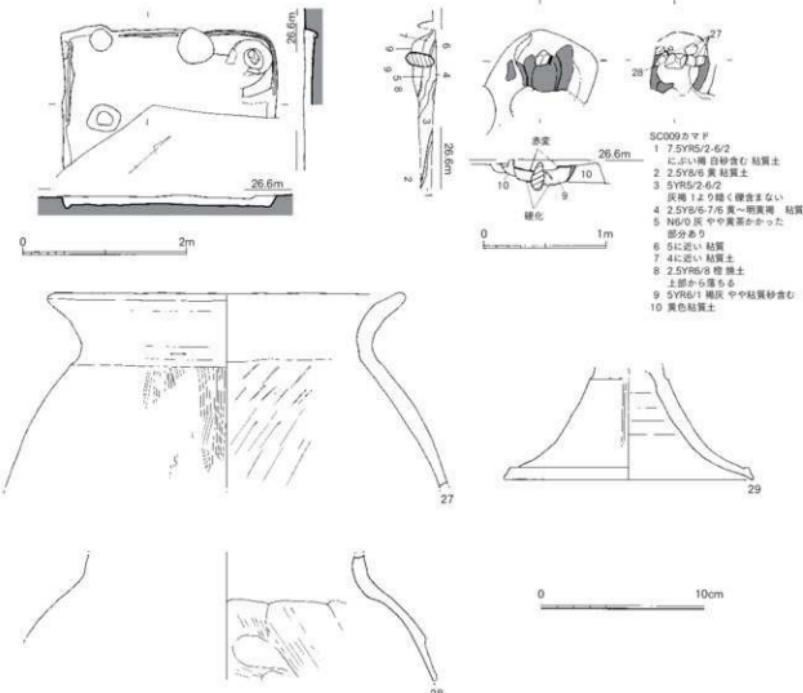


図9 SC009、出土遺物実測図 (1/60、1/40、1/3)

重なって出土した。

出土遺物 堅穴埋土からの遺物は少なく、外面叩きの甕片を主とする。形になるものはカマド出土の土師器の甕27、28である。27は1/4に接合できる胴部上部から口縁部が2つある。支石の左右の破片が接合している。大きく外反する口縁部を強く横なしで、外面は縱方向の刷毛目、内面は削りを施す。器面は白色から淡橙色である。28は外面叩き、内面は刷毛目状の当て具痕がみられる。支石左側出土破片とカマド前面出土破片が接合した。橙色を呈す。胎土に赤色粒が多く含む。29は遺構検出時に009部分で出土した須恵器の高脚部で、1/4からの復元である。内外面回転などで調整である。透かしの切れ目がみられ、その間隔から3方に透かしが入ると考えられる。6世紀後半から末か。

SC011 (図10) 調査区北側で検出した方形の堅穴で南北長300cm、東西は240cm以上で西側調査区外へ延びる。深さ15cmほどで埋土は暗褐色から黒褐色土で砂礫を含む。南東隅には炭混じりの灰褐色の粘質土が広がり、くぼみ状のSP172も同様の埋土から焼土塊、多数の土師器小片が出土した。堅穴の埋土からは6世紀から8世紀の遺物が少量ながら出土した。遺構が浅く遺物の帰属も明確ではない。堅穴建物とするより土坑とした方が良いかとも思われる。

出土遺物 30は須恵器の壺蓋で1/4からの復元。31は土師器の壺で高台が付く。器面荒れる。32から34は須恵器の壺身と蓋。32は1/4からの復元。34には2本線のへら記号がみられる。35は土師

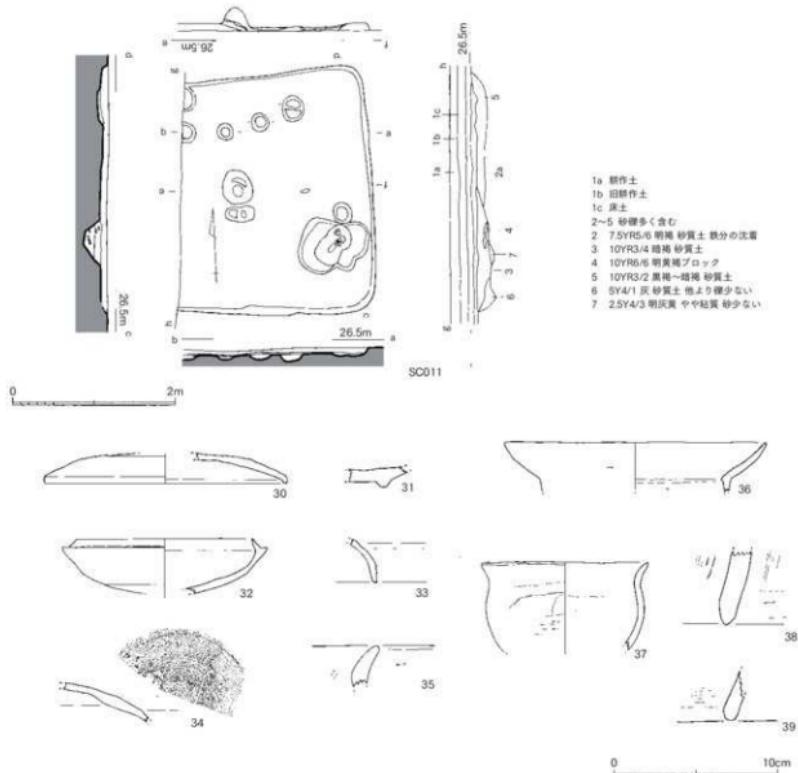


図10 SC011、出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

器の堀の小片で内面側部は削り。36は内溝する口縁部から頸部で屈曲する鉢形で胎土は細かく砂粒が少ない。淡橙色を呈す。1/7から口径16cmほどが復元できる。37は土師器の小型の鉢で、1/4ほどの接合しない破片2つがある。器壁は薄手で外面は荒いなどで粘土接合痕や削り状の調整がみられる。淡橙色を呈す。38、39は内傾する端部で盤の底部として作図した。30、31が8世紀代で出土遺物では新しい。後世の混じり込みでなければ遺構の時期により近いのであろう。

3. 掘立柱建物

S B O 1 6 (図11) SC008の南で確認した2×2間の掘立柱建物である。主軸方向はN-6°-Wに取り、南北310~330cm、東西320~340cmの規模である。柱穴は径50~70cmの円形で埋土は灰褐色から暗褐色土である。建物を意識して断面を観察できた柱穴はSP200と196のみでSP200で幅20cmほどの柱痕跡を確認している。柱穴には段をもって下がる部分を持つものがあり、柱を支えた箇所と考えられる。南西隅のSP114は規模が小さく浅いが、地中の巨礫の影響によるものであろう。南側中央のSP201はSK004、012に切られ、わずかに暗褐色土が残る。中央部は東柱の有無を精査したが確認できなかった。各柱穴から出土した遺物はわずかで、土師器、須恵器の小片のみである。

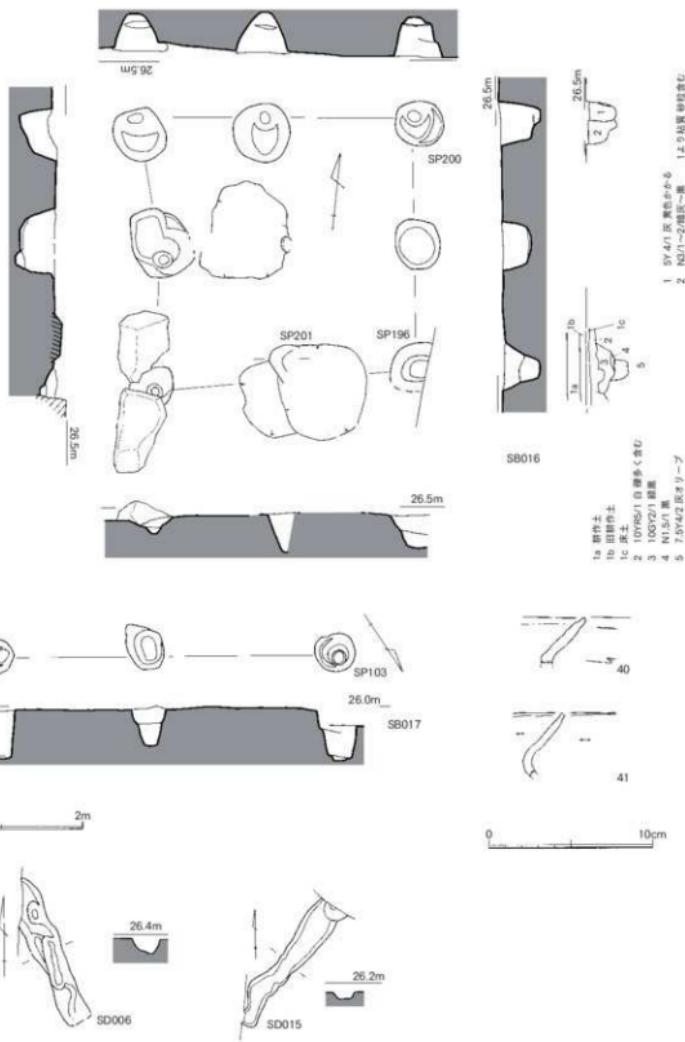


図11 SB016・017、SD006、015、出土遺物実測図 (1/60、1/3)

S B O 1 7 (図11) 調査区南端に直線上に並ぶ深めのピット3基を確認した。調査区際であるため展開がわからず、掘立柱建物を構成するか不明であるが取り上げる。ピット中心の間隔は180cm、230cmで、ピットの径は40~50cm、深さ47~65cmである。西端のSP195はSK014に切られる。遺物は少なく、刷毛目調整の土師器壺片が出土している。

出土遺物 40、41はSP103出土の土師器の壺である。器面はなで調整。

4. 溝

S D O O 6 (図11) SC008の南西に走る幅25~35cm、深さ15cmほどの溝で南側は浅くなり途切れ、北は調査区外に及びる。黄色かった灰褐色土を埋土とする。堅穴建物の埋土とは異なる。遺物は出土していない。

S D O 1 5 (図11) SC003の南に走る幅25~40cm、深さ8cmほどの溝で、覆土は006と同様である。外面に搔目を施す須恵器片が出土している。

5. 土坑

S K O O 2 (図12) 調査区南側の巨礫群中に掘られたくぼみ状で平面380×250cm、深さ55cmの規模である。中央東寄りと北よりには打ち砕かれた花崗岩の巨礫があり、矢の跡がみられる。周囲には花崗岩片が散乱する。埋土は水田土壤を含む灰褐色土で花崗岩片を含む。水田面に頭を出した巨礫周囲を掘削し、巨礫を碎いた跡と考えられる。土師器、須恵器小片の他、近代の磁器片、すり鉢が出土しており、近代以降である。

S K O O 4 (図12) 平面116×108cmの不整円形、深さ60cmの土坑で、底は径50cmほどの円形である。壁から床には厚さ1cmほどの橙色~黄褐色粘土を貼る。掘削時に欠けている部分も含めて全面に貼っていたと考えられる。SK002と同様の水田土壤を含む埋土である。遺物は土師質の小片である。近世以降と考える。

S K O O 5 (図12) 平面114×90cmほどの隅丸方形の土坑で深さ23cmほどである。埋土は黄褐色土に水田土壤の灰色土を含む。SK004と近い時期か。

S K O 1 3 (図12・13) SC007の南で確認した平面130×108cmの楕円形の土坑で深さ31cmほどである。埋土は茶褐色土で砂粒は少なく他の遺構のものと異なる。中央に40cm大の角礫が出土し、その周囲から土器片が出土した。

出土遺物 42から45は土師器でいずれも胎土に砂粒を多く含む。42は壺の頸部で外面に細かな刷毛目が見られる。43は薄手の壺の底部で外面は刷毛目調整、内面は成形時の指頭圧痕が残る。44は高坏で1/5からの復元。器面はやや厚手で、外面は横なで痕が明瞭で屈曲部に刷毛目痕が残る。内面は荒れる。45は厚手の壺の胴部下部で接合する。外面刷毛目の後なで、内面は削りで木口痕がみられる。巻末の写真に示した85は火成岩製の叩き石で端部に打痕がある。縦長の自然石の側辺を打ち欠き持ちやすい大きさに成形している。大きさは9.1×6.0×3.2cm、310g。

S K O 1 4 (図12) 調査区南西隅で南北方向の落ちを検出した。灰褐色から暗灰色の粘質土を埋土とし、遺構面からの深さ25cmほどである。南、西壁の土層では4c層を切り、深さ45cmほどとなる。床面は確認できた範囲では平坦で、土坑か堅穴建物になると考えらえる。遺物は土師器を含む小片3点のみである。

S K 1 9 4 (図12・13) SC008の床面で確認した不整円形のピット状の遺構で土師器の複合口縁壺が横倒して出土し、その中に短頸の壺が出土した。複合口縁壺は口縁部を南にし、北側の下半

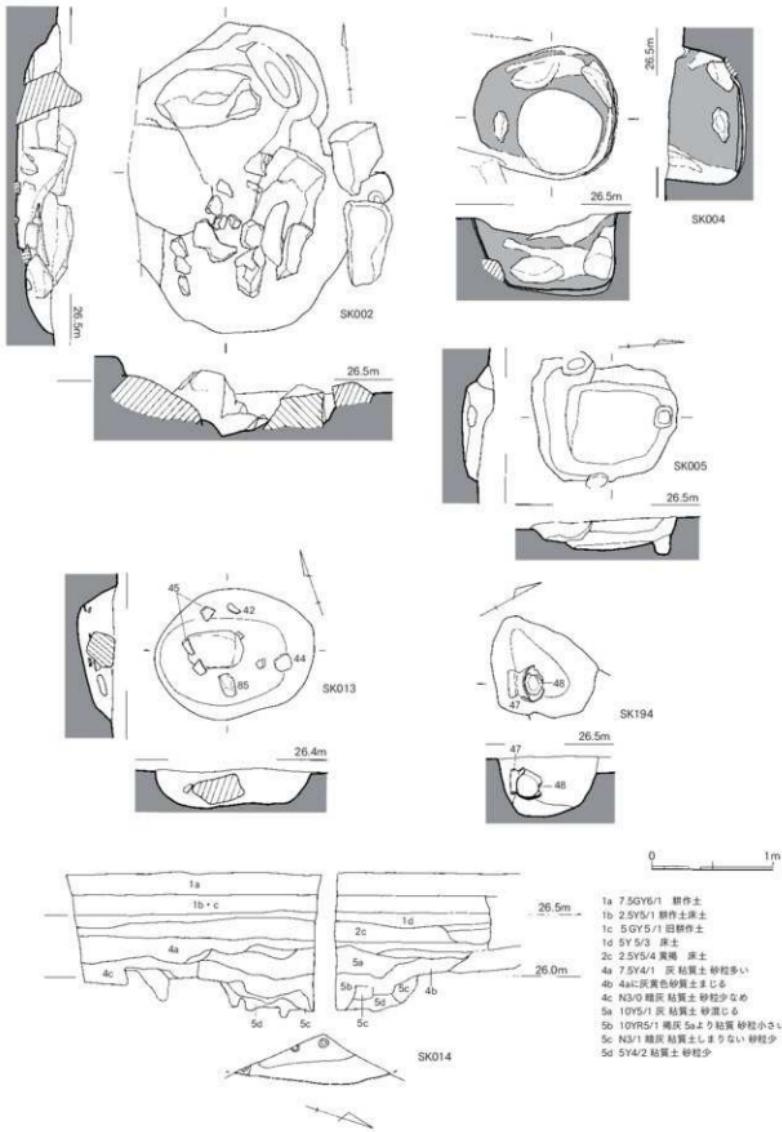


図12 土坑実測図 (1/40)

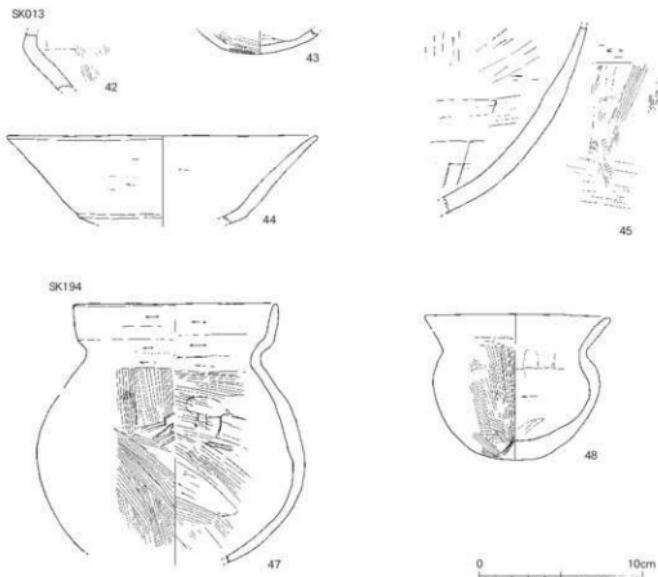


図13 土坑出土遺物実測図（1/3）

部を欠いている。短頸壺は複合口縁壺頸部より大きく、口縁部から挿入することはできない。複合口縁壺の胴部を欠いた後に短頸壺を据えたと考えられる。

出土遺物 47は口縁帯が複合口縁状の壺形土器で器壁はやや厚手で成形は粗雑である。口縁部は横なでを施し、胴部外面は、頸部付近は主に縦方向の刷毛目、最大径よりやや上から下は斜め方向の刷毛目で上部の縦刷毛目を切る。ほぼ斜め刷毛目部分から下に炭化物が付着し、最大径部の上下によく残る。内面は斜め方向の深い削りの後にやはり斜め方向の刷毛目を施し深く残る。頸部屈曲部に刷毛目は及ばず、削り調整が頸部の横なでを切る。器面くすんだ橙色を呈す。48は口縁部横なで、胴部外面は縦方向の刷毛目、内面は削り状の痕跡がわずかに残るがなで、指抑え痕が残る。橙色を呈す。

S X 0 0 1 (図14・15) 調査区南端部の巨礫群付近から遺構面は南へ緩やかに落ち、東壁土層で4層とした暗褐色が堆積する。遺構検出を行いながら地山と考えている黄褐色土まで掘削した。この面では若干の高低差はあったがピット、SK014以外の遺構は検出できていない。ただし、東壁、南壁には4c層、4d層に立ち上がり状がみられ、遺構の切り合いがあった可能性もある。試掘トレンチの北と南では10cm弱の比高差があり、SD101とした幅10cmほどの溝などは竪穴遺構の存在を思わせる。4層からは土師器片を主体として弥生土器から8世紀代の須恵器までの遺物が出土した。量は多くはなく中袋1ほどで土師器片を主体とし、須恵器が少量入る。土師器甕は外面叩き片が目立ち、これに搔目状を施すものがある。図化したほかに厚さ1.7cmほどの羽口の小片がある。

出土遺物 4層中の細かな分層、取り上げは行っていない。49から52は須恵器。49は高杯の脚部上部で1/3からの反転。外面搔目、内面は絞り痕がみられる。透かしが3方に入ると考えられる。

- 1a 7.50Y6/1 脱水土
 1b 2.5Y5/1 脱水土
 1c 5G/5/1 固結土
 1d 5Y/3/1 土
 2a 5Y/4/1 黄褐色
 2b 5Y6/1 黄褐色
 2c 2.5Y5/4 黄褐色
 2d 2.5Y4/2 黄褐色
 3a 2.5Y4/1 砂質土
 3b 2.5Y4/1 砂質砂質土
 4 全体に粘質あり
 4a 7.5Y4/1 黄褐色
 4b 4mに黄褐色砂質土まじる
 4c N2/0 棕褐色
 4d 5Y5/1 黄褐色
 4e 10Y6/1 黄褐色
 4f 10Y5/1 オリーブ色
 4g 5Y4/1 棕褐色
 4h 5Y3/1 棕褐色
 4i 5B2/1 青黒
 4j 10G2/1 綿黒
 4k 4mに近い

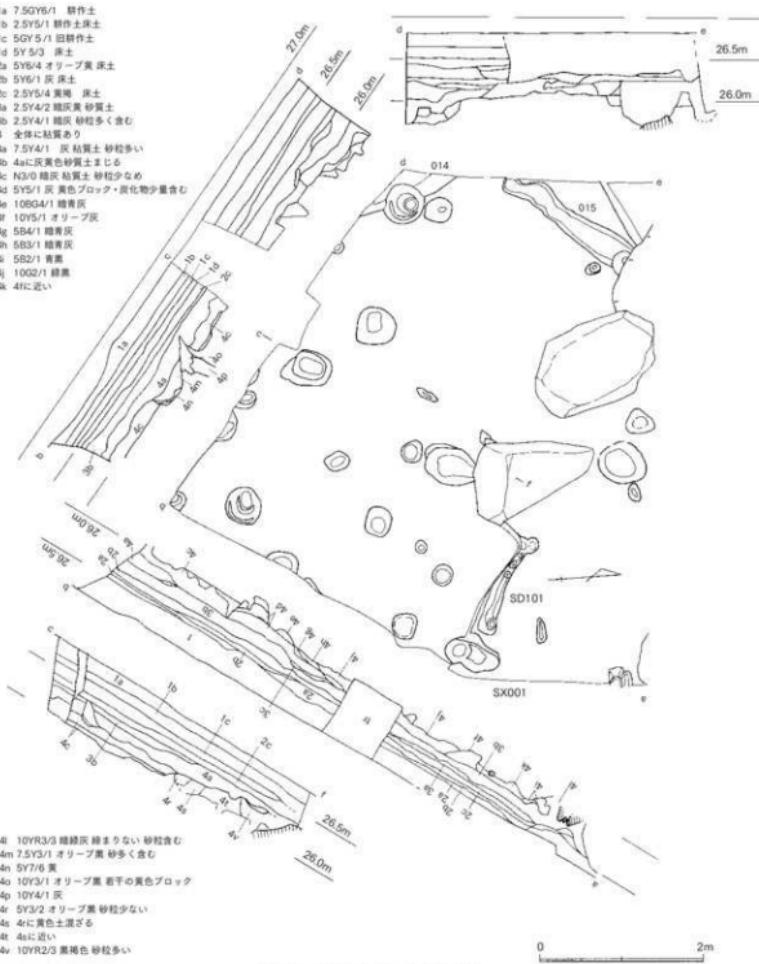


図14 SX001実測図 (1/60)

50はハソウの口縁部か。薄手の器壁の外面にへら書き斜線を密に描く。51は坏身、52は坏蓋片である。53から63は土師器である。53は壺の口縁部で横なで調整。胎土が細かく砂粒をほとんど含まない。くすんだ橙色を呈す。54は壺の頸部から胴部で外面叩き、内面は横方向のなでと縱方向のへらなで状がみられる。胎土精良。55、56は外面平行叩きの後に刷毛目で内面は削げる。胎土細かく砂粒をほとんど含まない。同一個体か。57は土師器で1/8からの反転。搔目が明瞭。58は高杯の脚上部でなで調整。胎土細かく砂粒少ない。59は布留式系の壺の口縁部。60は鉢の口縁部で口唇部の成形が荒い。内面削り。61は高杯で内外面研磨調整だが荒い。内面は暗文風に施す。くすんだ茶色を

呈す。62は甕の口縁部で内面横方向、外面斜め方向の刷毛目を施す。63は薄手で内外面刷毛目が残る。底部か。64から70は検出面の出土。64から67は須恵器で坏蓋と甕口縁部。68、69は土師器で甕の口縁部。70は平面隅丸長方形の脚部で成形は粗で粘土のはみ出しが多い。胎土は細かく淡く明るい橙色を呈す。71は4層下で検出したピットSP105出土の須恵器坏身で1/5からの復元。生焼けで淡橙色を呈し、内面にへら記号がみられる。

6. ピット

ピットは調査区全体で確認したが粗密がある。特にSC007と011の間には多くのピットを確認し

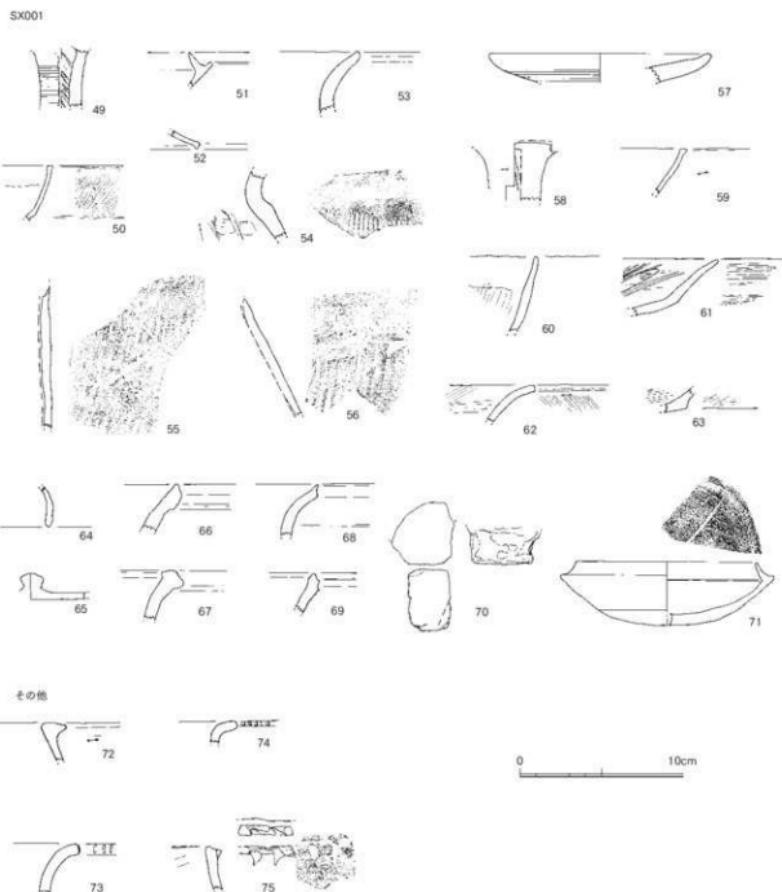


図15 SX001出土遺物、その他の遺物実測図（1/3）

た。掘立柱建物や堅穴建物の主柱穴等になるものもあると考えられるがまとまりを捉えきれていない。その中で東側の壁沿いにやや大型で目立つSP149からSP183は、200cmほどの間隔で直線上に乗るようでもあるがやすれており、深さも異なり建物とするには不確かである。SP190と149では径20cm弱の柱痕跡を確認した。

7. その他の遺物（図15・16）

72から75は弥生時代以前の土器をまとめた。72から74はSX001出土。72は前期末の甕の口縁部でなで調整である。73、74は外反口縁で口唇部に全面刻みを施す。75は刻目突帯文土器で斜め方向に深い刻目を施す。小片で傾きは不確実。SC007、008検出時出土。

図16には各所出土の石器をまとめて示した。76から78は安山岩、79は黒曜石製の石礫である。77は風化で剥離がはっきりしないが、主剥離面を残すようでもある。79は調整剥離により側刃が鋸歯状に近い。80は黒曜石の剥片の側面に角度の深い剥離を施す。スクレーバーか。81、82は自然面があばた状の黒曜石の円盤で松浦産と考えられる。剥離面の風化が進んでいる。81は厚手の剥片、82はコアである。83は安山岩でSC008とSC011出土の破片が接合した。両側面に粗い剥離を施す。石核だがスクレーバーとしても右手で保持しやすい形状である。図化した以外に黒曜石14点、安山岩片11点が出土した。安山岩は全て碎片である。黒曜石は2点の石核と他は剥片、碎片である。そのうち巻末写真の84は姫島産と考えらえる剥片である。風化の進んだ松浦産の黒曜石は草創期から早期の早い時期の遺跡の存在をうかがわせる。

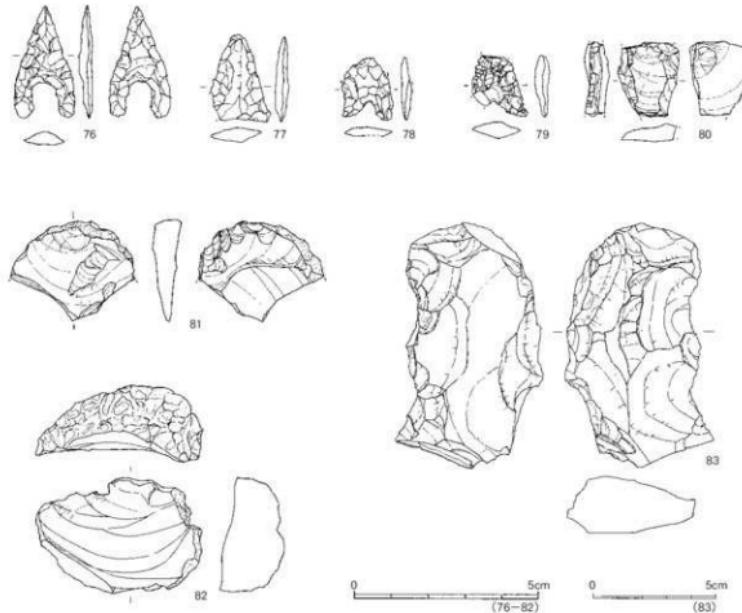


図16 出土石器実測図（3/4、1/2）

IV おわりに

縄文時代から近代までの遺構・遺物を検出した。遺構は伴う土器が少なく時期が決めがたいが、古墳時代が主となる。その内訳はSK013、194が古墳時代前期後半から中期はじめ、SC003、007、009は後期と大きく二つの時期にまとめることができよう。SC008はさらに遺物が少なく不確かだが前者に入る可能性もある。南東100mで実施した19次調査では古墳時代後期の6世紀末から7世紀初めを主体とする堅穴建物群と前期後半の堅穴建物1基を確認しており、今回確認した遺構と同様である。19次調査から類推すれば、掘立柱建物SB016は後期の可能性がより高い。6世紀末から7世紀初めの遺構は1、2、4、18次でも確認されており、一帯に堅穴建物と掘立柱建物からなるこの時期の集落が広がるものと考えられる。また油山山麓に広がる古墳群との関連も想定されよう。

今回の調査区の遺構面は南端まで遺構が広がるが、南側の谷に向かって下がる。道路より南の試掘調査では谷内の粘質の堆積が確認されている箇所もある。そのような調査結果や図17の等高線から破線で示した付近に地形の変換点

が想定され、その付近まで遺構が広がる可能性がある。

遺物のみであるが、81、82の黒曜石は縄文時代早期前半以前のもので、4、7次調査などと同様にこの時期の人の活動を知り得た。また、SK002では巨礫群と対峙する水田耕作においての苦悩を感じられる。

石器計測表

遺物番号	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	出土位置
76	3.0	1.60	0.35	1.19	
77	2.33	1.58	0.33	1.24	SC011
78	1.63	2.32	0.26	1.68	SP127
79	2.14	1.22	0.48	0.77	SX001
80	1.99	1.60	0.50	0.68	SX001
81	2.70	3.30	0.76	6.54	SX001
82	3.13	4.59	1.77	27.0	SP102
83	9.72	5.60	2.42	150	SC011・SC008



図17 調査地点位置図 (1/4000) 昭和30年代



1 調査区全景 南から



2 全景 北から



3 調査区北半 西から



4 調査区南半 西から



5 SC003 南西から



6 SC003土層 東から



7 SC007検出時 西から



8 SC007床面 西から



9 SC007土層 東から



10 SC007掘方 西から



11 SC008 北西から



12 SC007・8 北西から



13 SC011 南から



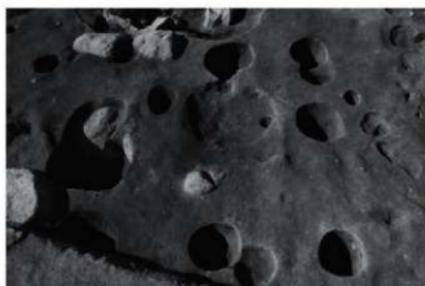
14 SC009 南東から



15 SC009カマド 南から



16 SC009カマド支石 南から



17 SB016 北東から



18 SK002 南から



19 SK004 西から



20 SK013 北から



21 SK194 西から



22 SK014 北東から



23 SX001 東から



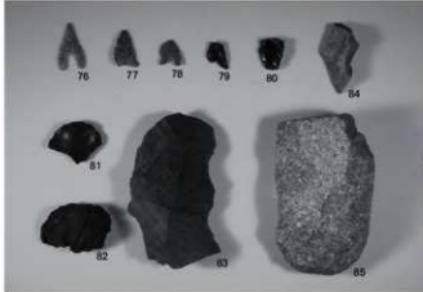
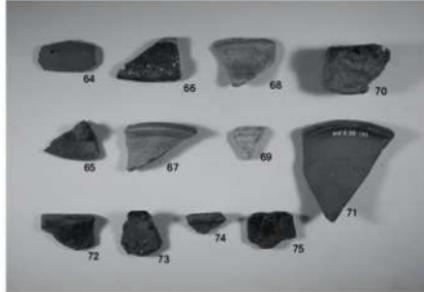
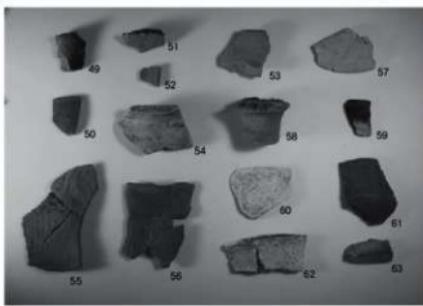
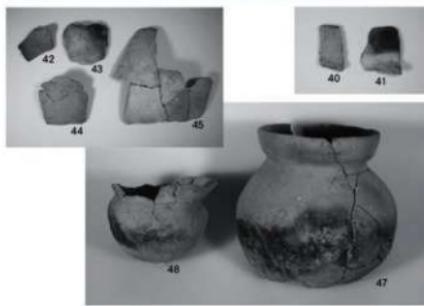
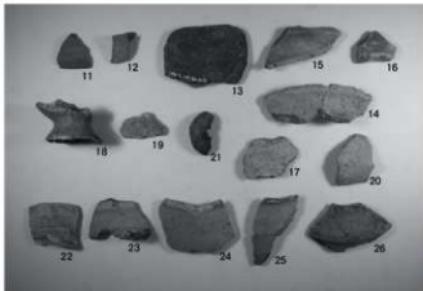
24 SX001 北西から



25 調査風景 北西から



26 南端部南壁土層



報告書抄録

ふりがな	のけいせき 9						
書名	野芥遺跡9						
副書名	第20次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1478集						
編著者名	池田祐司						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2023年3月23日						
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (ml)	調査原因
のけいせき 野芥遺跡	さぬくのけいせき 早良区野芥五丁目 378番1	40137	319	33°32'15" 130°20'47"	2020.10.12～ 2020.11.11	2115ml	記録保存

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
野芥遺跡第20次	集落	古墳時代後期	竪穴建物、掘立柱建物	石鏡、弥生土器、土師器、須恵器	
要約					
油山山塊が平野に接する扇状地状の緩斜面に位置する。黄褐色粘質土および灰白色砂質土上で古墳時代の集落遺構を確認した。遺構面は南端部で南へ下がる。					
遺構は竪穴建物5基+a、土坑、ピットである。竪穴建物は残りの良いSC007で一辺4.3mの方形で4基の柱穴を確認した。SC009は一辺2.6mほどで北側にカマドを持つ。出土遺物が少なく時期は決めがたいが、6世紀末から7世紀初めを想定している。南側は谷へと低くなっていると考えられるが、端部でも竪穴建物と考えられる遺構を確認した。また2間×2間の掘立柱建物を1棟確認している。					
南側では1~2m大の礫が遺構面に突出し、竪穴も規制を受けている。水田耕作時にも障害になったと考えられ、礫を割って埋めた痕跡を確認した。					
遺構埋土からは、石鏡、松浦産の黒曜石原石など縄文時代の遺物も出土している。					

野芥遺跡9

- 第20次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1478集

2023（令和5）年3月23日発行

発 行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 株式会社ミドリ印刷
〒812-0016 福岡市博多区博多駅南6丁目17番12号